

ときめき インタビュー



町屋 良平
まちやうへい/Ryohei Machiya

…プロフィール…

昭和58年、東京・浅草生まれ。3歳から24歳まで越谷市に居住。埼玉県立越ヶ谷高校卒。平成28年『青が破れる』で第53回文藝賞を受賞し、同作で作家デビュー。平成30年5月に発表した『しき』が第159回芥川賞候補に選ばれるも受賞を逃すが、同年10月発表の『1R1分34秒』で第160回芥川賞を受賞。今年6月に越谷を舞台としたパラレル私小説『愛が嫌い』が出版されている。

受け入れられる 予感がした受賞作

そして今年1月、新進作家に与えられる芥川賞に輝いた町屋さん。受賞作『1R1分34秒』は、町屋さん自身がボクシングを習っていた経験から書き上げた作品で、壁に突き当たっている21歳のプロボクサーが、駆け出しトレーナーの変わり者、ウメキチの元で新たな可能性を切り開いていく物語。



体が弱かった子ども時代の反動で社会人になってはじめてボクシング

今年1月、若きプロボクサーの葛藤を描く『1R1分34秒』で第160回芥川賞を受賞した町屋良平さんは越谷育ち。幼少期から多感な学生時代を過ごした越谷での暮らしと風景が、創作の原点になっていると言います、小説の舞台としても登場させています。

同世代の作家に 刺激されてプロへ

町屋さんが越谷に住み始めたのは3歳から。以降、24歳まで続いた越谷での暮らしの中で、小説家への夢を育んできたといいます。「子どものころから物語が好きで、小学生のときは家の近所の北部市民会館の図書室によく通っていました。そのころは本を読むより、紙芝居を眺めていることが多かったですね。国語が好きで作文も結構得意だったので、子ども心に『小

説家になれるんじゃないか』と思っていました。実際に小説らしきものを書き出したのは中学生のときで、当時は大好きなさくらもこさんの作風をまねて書いたりしていましたね」と町屋さん。高校時代、フリーター時代と書き続けていましたが、本気でプロの小説家を目指そうと決意するのは20代に入ってから。「羽田圭介さんや綿矢りささんなど自分と同世代の若い作家が活躍していることにすごく刺激を受けましたね。それで自分もプロと

してやっていきたいという気持ちが強くなって、デビューにつながる文学賞に応募するようになりました」。習作を繰り返し、平成28年、32歳のとき、『青が破れる』で新人の登竜門として名高い文藝賞を受賞し、ついにデビューを果たします。

「羽田圭介さんや綿矢りささんなど自分と同世代の若い作家が活躍していることにすごく刺激を受けましたね。それで自分もプロとしてやっていきたいという気持ちが強くなって、デビューにつながる文学賞に応募するようになりました」。習作を繰り返し、平成28年、32歳のとき、『青が破れる』で新人の登竜門として名高い文藝賞を受賞し、ついにデビューを果たします。

表現しすぎない こだわり

現代の若者の心のひだをみずみずしくリアルに描いたものが多い町屋さんの作品は、言葉の使い方や表記に至るまで独特の世界観があります。

「執筆する上で大切にしているのは、読者一人ひとりが読みながら頭の中で整理して、自分の状況に置き換えられる物語として手渡したいということ。だからあまり力チツと限定的な表現をしないで、柔軟性のあるぶよぶよしたイメージにしておくことや、読んでいるときの視覚的な柔らかさも考えて書いています」。さらに町屋さんが作家として目



平成31年2月21日に行われた芥川賞の贈呈式

標とすることを伺うと、「長く書き続けられる小説家でありたいというのが、まず大きな目標です。それから若い人が『自分も文学の世界に入ってみたい!』と思うきっかけになるような作品を書いていけたらと思いますね」

最新作に込めた 越谷への「愛憎」

会社員として働きながら執筆活動をしている町屋さんは現在東京都内に住んでいますが、いまも時間があると越谷まで散策に来るそうです。「子どものころによく行った場所、よく通った道にはなみなみならぬ思いがあるんですね。今でもよく行く散歩コースは、せんげん台駅からスタートして大袋北

小、北中と回るコースと、北越谷や越ヶ谷高校周辺を歩くコースかな。越谷を散歩していると小説のアイデアが浮かんでくるし、アイデアが浮かぶことを期待して歩いている面も正直あります。通勤の混雑さえなければ、本当は今も越谷に住みたいと思っているんですよ」

越谷への思い入れの強さを自負する町屋さんが6月に出版した最新作『愛が嫌い』は、久伊豆神社へ鯉をみにゆく、という書き出しで始まる、越谷が舞台の小説。「好きな越谷の風景、住んでいた当時の成長過程の鬱屈とか、自分自身の情懷をしっかりと描こうと思った作品で、越谷への『愛』と『憎』がすべて詰まっています。パラレル私小説と銘打っています

物語を紡ぐ原点にはいつも 幼少から青春時代を過ごした 越谷がある。



「執筆は夜。集中すると自分の身体から抜け出るような感覚になるんです」

愛が嫌い (文藝春秋)

「しすけさ」「愛が嫌い」「生きるからだ」の3作を収録したパラレル私小説集。

1R1分34秒 (新潮社)

デビュー戦をKOで勝利して以降成績が振るわなかったプロボクサーの「ぼく」は、新しいトレーナーのウメキチと出会う。



作家 町屋 良平 さん

小説を書くとき使うのはスマホとパソコン。「一人称の文章はスマホ、三人称はパソコンというイメージです」